

スピノザにおける時間に関わる感情

黒川 勲

The Emotions in Connection with Time in Spinoza's Philosophy

KUROKAWA, Isao

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第36巻第2号

2014年10月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 36, No. 2, October 2014

OITA, JAPAN

スピノザにおける時間に関わる感情

黒川 勲*

【要旨】 スピノザは『エチカ』において感情の療法について論じている。本稿では希望と恐れをはじめとした時間に関わる感情の特性及びそれらに対する感情の療法の解明を試みる。

時間に関わる感情は希望と恐れを基盤とするが、それらに対する療法は未来と過去の時間様相及び疑念の存在への対処が要となる。スピノザにおいて感情の療法は理性による認識を実行することにあるが、時間に関わる感情への理性的認識は認識の対象及び主体の二方向から神の愛をもたらすことになるのである。

【キーワード】 感情 時間 持続 過去 未来

はじめに

私たちは時間のなかに生きている。私たちは始めと終わりのはざまのなかでうつろいを常とする生を刻んでいる。そして、生の始めと終わりの存在を思い知るとき、過去、現在、未来における私たちの有り様とそれらへの想いは、私たちの生の実感を確かに形づくるものとなる。スピノザは、人間が避けがたくもつ生の実感を感情と見なし、感情生活における悲しみと隷属を喜びと自由へともたらす決定的な方途を自らの倫理学とする。

本稿の目的は、時間様相¹⁾として過去と未来とに注目し²⁾、それらに関わる感情の特性を見いだすとともに、それらに対する「感情の療法 (affectuum remedia)」(E.5.Praefatio)の要点を明らかにすることにある。問題として視野に入れる感情は、「希望 (spes)」と「恐れ (metus)」をはじめとした、「安堵 (securitas)」・「絶望 (desperatio)」・「満悦 (gaudium)」・「落胆 (conscientiae morsus)」の六つの感情である。

本稿の論述にあたって、まずスピノザにおける「過去と未来 (praeteritum et futurum)」のあり方及び「持続 (duratio)」の意義を把握する。続いて、スピノザの「感情 (affectus)」の理解を確認し、『エチカ』第三部「感情の起源と本性について」の言表から過去と未来に関わる感情の特性をえる。最後に、過去と未来に関わる感情に対する療法がどのような内容もちうるのかを考察したい。

平成 26 年 6 月 2 日受理

*くろかわ・いさお 大分大学教育福祉科学部社会認識教育講座 (哲学)

I 時間と持続

1 過去と未来

スピノザにおいて過去と未来という時間様相そのものは、どのようにとらえられているのだろうか。また、過去を保存すると考えられる記憶、未来を先取りすると思われる予想とはどのようなものだろうか。スピノザは新スコラ哲学の論題について解説した『形而上学的思想』において「時間 (tempus)」について言及している。そこでは、時間とは事物を説明するための「思惟の様式 (cogitandi modus)」であり、時間は持続を説明するための手段とされる³⁾。こうした時間理解はスピノザ自身の哲学においても基本的に踏襲されている。つまり、持続は「永遠 (aeternitas)」とは異なり、有限な存在者に関して言及されるものであるが、「存在の無際限な継続 (indefinita existendi continuatio) (E.2.D.5) と定義される。そして、持続の状態を説明するために時間概念が用いられると考えるのである。そこで、「無限 (infinitus)」と「無際限 (indefinitus)」との区別を論究するなかで、時間についても論じられる「書簡 12」の内容を検討して行きたい。

スピノザは無限をいくつかに分類しているが、その一つとして次のような区別をたてる⁴⁾。

- ① 何ら限界をもたない故に無限と言われるもの
- ② その最大最小を知りながらも、その部分がいかなる数によっても説明できない故に無限と言われるもの

私たちは一般に、無限を「限界のない (in-finis)」ものとして、外部に制限のないものに無限を認め①の意味に解している。一方で、実際には限界を知りながら、その内部の部分の数の算定不可能性から②で示される事柄も無限と見なす。スピノザによって、この②の無限はむしろ規定不可能な故に「無限定・無際限 (in-definitus)」と呼ばれることになる (Ep.12,p.61)。このようにまず無際限は数に関係づけられた上で、さらに算定不可能性あるいは数概念を超越することから使用される表現なのである。それ故に、「存在の無際限な継続」と定義される持続は規定不可能ではあるが、まずある「量 (quantitas)」を示していると考えなければならない。

そして、スピノザは私たちの量に関する認識能力について次のように述べる⁵⁾。

「私たちは量を二様の仕方考えます。1つは、それを抽象的にあるいは表面的に感覚の助けによって、想像力においてとらえます。もう1つには、それを実体としてとらえ、知性によってのみとらえます。もし想像力において見る限りの量に注目するならば—これは最もしばしば容易に行われることですが—量は可分的で、有限で、部分からなり、多様に現れます。もし知性において見る限りの量に注目するならば、それ自体において考えるならば—これは極めて困難なことですが—、(中略)量は無限で、不可分的で、唯一のものとして現れます。」(Ep.12,p.56)

私たちは「抽象的にあるいは表面的に (abstracte sive superficialiter)」ものをとらえる「想像力 (imaginatio)」と、「実体として、それ自体として」とらえる知性という二つの認識能力をもつ。そして、想像力によってとらえるならば、量は「可分的で、有限で、部分からなるもの」として現れる。なぜなら、私たちは量を「出来る限り容易に限定」しようとして、量をそれ自体からではなく抽象的に扱い、表面的に分割して、数・時間・割合によって部分を数え上

げることによって認識しようとするからである。こうして見れば、スピノザにおいて数・時間・度合の概念は、量を想像力においてとらえる「補助手段 (auxilium imaginationis)」であり、「想像力の様式 (imaginandi modus)」として用いられるものなのである。

「度合、時間、数は思惟の様式、あるいはむしろ想像力の様式にほかならない。」(Ep. 12,p.57)

スピノザにおいて過去や未来の時間様相は想像力の様式であり、その意味で過去や未来そのものは決して実在ではなく、具体的な事態としての実在性をもっていない。

それでは、私たちが過去を想起する際の記憶及び未来を構想する際の予想とはどのようなものなのであろうか。スピノザは記憶について、「脳における印象の感覚が一定の持続の意識と結びついたもの」(TIE,§83)、あるいは「身体の外部に存在する事物の本性の諸観念の連結」(E.2.P.18.S)と見なしている。すなわち、外部からのいくつかの刺激によって、身体(脳)に刻みつけられた物理的「痕跡 (vestigium)」が精神においては心理的「像 (imago)」となり、それらの像が「連結 (concatenatio)」し、一つのものとして存続する「印象 (impressio)」が記憶なのである。それ故に、スピノザは記憶を「想像そのもの」と述べることになる(E.3.P.2.S)。一方、予想についてスピノザは明示的に言及してはいないが、ある種の虚構であることは明らかである(TIE,§50-§65)。なんの観念をもたずに虚構することは不可能であるから、虚構は記憶に保存された幾つかの観念あるいは像を合成することによって作り出される。そうして見れば、スピノザにおいて予想は記憶と同じく想像そのものと考えなければならない。また言うまでもなく、記憶と予想は現在の心身において形成される表象像なのであるから、一般に何らかの形で実在すると思われる過去や未来とは関連のない現在の想像なのである。

2 持続の意義

スピノザが「存在の無際限な継続」と定義し、時間概念を適用する持続は、一般に二つの意味を表現すると考えられる。一つには存在の継続の長さ、つまり量を示す表現、もう一つは存在が継続的な本質をもつ、つまり質としての表現である。スピノザもこうした二つの意味で持続という表現を用いており、『エチカ』第二部の持続の定義と説明において同時に見てとれる。

「持続とは存在の無際限な継続のことである。説明：私は無際限な継続という。なぜなら、存在の継続は存在する事物の本性によっては決して限定されえないし、また動力因によっても限定されえないからである。なぜなら、動力因は事物の存在を必然的に定立するが、除去することはできないからである。」(E.2.D.5)

定義のなかで述べられているように、持続は存在する事物の「無際限な」継続であり、前節でも述べたように規定不可能な量としての表現で説明される。このような量としての持続は、『エチカ』においても抽象的にとらえられる(E.2.P.45.S.)故に、想像力の様式によって時間的にとらえられるものである(E.5.P.23.Dem.)。一方、先の定義の説明に見られるように、持続は事物の存在が「本性や動力因によって」継続する本質をもつという、質としての意味も示している。スピノザはこのような質としての持続を、存在する事物の本質のみから考察する限り、一定の時間を含むとは考えない。むしろ、そのような持続は本性上、非時間的なものであると

主張するのである (E.4.Praefatio)。

それでは、持続が示す非時間的な本質とは何であろうか。それは、事物の「現実的本質 (actualis essentia)」である「自己の存在に固執する力・コナトゥス (conatus)」(E.3.P.7) にほかならない。スピノザは『エチカ』第三部定理 4—定理 8 においてコナトゥスについて論じている。コナトゥスの論述が開始される定理 4 は次のものである。

「いかなるものも外的原因によらなければ破壊されない」(E.3.P.4)

私たちの経験する世界は、生成消滅をはじめとした変化・変転が常態である。スピノザは消滅に関して、その原因を決して事物の内部において認めず、外部にのみ原因を求める。定理 4 の証明は「定義 (definitio)」と「本質 (essentia)」の概念規定によつてのみ行われているが、事物の本質とは「それが与えられれば、そのものが必然的に定立され、除去されれば、そのものが必然的に消滅するようなもの」(E.2.D.2) である。そうして見れば、定義で示された本質はその事物の存在を肯定するのみで否定することはない。換言すれば、本質はそのものを定立するのみで、そのものが破壊される場合には定義の示す本質の内部にではなく、外部に原因をもたなければならない。そして、このような破壊をもたらす外的原因は、一方が他方に対して「対立的本性 (contraria natura)」をもつことになるが、反対に同一の事物の本性のなかにおいては対立的本性は両立することはないのである。

「ものは一方が他方を破壊しうる限り、対立的本性をもっている。すなわち同一の主体においては対立的本性をもちえない。」(E.3.P.5)

すなわち、ものは外的原因を度外視する限り、すなわち「同一の主体においては (in eodem subjecto)」、まさにその本質によって自己同一性を保持するのである。そして、自己同一性を保持する事物の本質は『エチカ』第一部において、神を起源に定義づけられ、すでに与えられている。すなわち、スピノザにおいてすべてのものは神においてあり、神によって考えられるものである以上、事物は神の属性 (延長と思惟) の「変様 (affectio)」あるいは神の属性を一定の仕方では表現する「様態 (modus)」である (E.1.P.25.C)。また、神は事物の存在だけではなく、その本質の作用因でもある (E.1.P.25)。それ故に、事物の本質は神の属性を一定の仕方では表現してはならない。そしてこのことは、神の存在と本質が同一であり (E.1.P.20)、また同時に神の本質と力が同じものであることから (E.1.P.34)、事物の本質は神が活動する力を一定の仕方では表現していることを示している。事物の自己同一性を保持する本質が神の力の一定の表現であるならば、事物は自己を肯定し、自己自身でありつづける力をもつことになるであろう。

「すべてのものは、それ自身においてある限り、自己の存在に固執しようと努める。」
(E.3.P.6)

このような定理 4 から定理 6 までの考察を踏まえ、スピノザはコナトゥスを事物の現実的本質とする定理 7 を導き出す。

「それ故に、それ自身だけであるいは他のものとともにあることをなし、あるいはなそうと努める力あるいはコナトゥスは、(この部の定理 6 より) 自己の存在に固執しようと努める力あるいはコナトゥスであり、事物そのものに与えられた、すなわち現実的本質にほかならない。」(E.3.P.7.Dem)

コナトゥスは事物の本質であり、無限な神が活動する力を一定の仕方では表現し、本質的かつ現実的な活動を実現する。それ故に、破壊をもたらす外的原因を度外視し、本質そのものに注目する限り、事物の継続を制限する有限な時間を本質の内部に含んでいるとは考えられない。むしろ、無際限な時間をもつと考えなければならないのである⁶⁾。こうして、先の「持続とは存在の無際限な継続」という定義が支持されるのである。

「あらゆるものが自己の有に固執しようと努めるコナトゥスは、有限な時間ではなく、無際限な時間を含んでいる。」(E.3.P.8)

このようにして、質の表現としての持続は現実的本質であるコナトゥスを示しているのであるが、それは理性的に定理と証明を積み重ね、同時に神との必然的な関係においてとらえられた帰結である。スピノザにおいて、このような認識は「永遠の相のもとで (sub specie aeternitatis)」の認識と呼ばれるが、永遠の相のもとでの持続の意義を再確認するならば、持続は決して抽象された量ではない。それ自体として無際限とされていた持続は、その無際限性の根底に神の無限かつ永遠な本性を内在させていると考えなければならないのである。まさに、持続は「その無限定性故に、かえって永遠への道をそれ自身のうちに内蔵している」⁷⁾のである。

II スピノザにおける感情

1 感情に関するスピノザの理解

続いて、スピノザにおける感情の理解を確認し、『エチカ』第三部「感情の起源と本性について」⁸⁾の言表から過去と未来に関わる感情の特性を把握したい。スピノザは、『エチカ』第三部冒頭で感情を次のように定義している。

「感情とは、身体そのものの活動力を増大させたり減少させたり、あるいは促したり抑えたりするような身体の変様であると同時に、これらの変様の観念であると、私は理解する。」(E.3.D.3)

スピノザにおいて、人間は神の実体をもつ属性の変様あるいは様態としての身体と精神からなる存在者である。それはまた、神の力を一定の仕方では表現する活動者としての存在であることも意味している。それ故、身体と精神の双方と活動力によって定義される感情は人間の全体的生の状態を示していることになるが、なによりまず感情とは身体の変様の側面から定義づけられるものである。このことは、感情の特質として具体的な生の現実性あるいは経験的現実性を

見ておかなければならないことを意味している⁹⁾。

またスピノザにおいて、人間は「自然の一部分 (naturae pars)」として他の外的存在から多様な働きかけを受けているのが常態である。その働きかけによって身体と精神は変様し、感情が成立することになるが、このような外的原因と自己自身との関係から異なる性格の感情が生じることになる。すなわち、感情の基礎である身体の変様に対して、自らの本性は「部分的原因 (partialis causa)」でしかありえず、身体の「非十全な観念 (idea inadaequata)」によって生じる「精神の受動 (mentis passio)」・「受動感情」と自らの本性が全体的原因であり「十全な観念 (idea adaequata)」によって生じる「精神の能動 (mentis actio)」・「能動感情」である。そして、このようにとらえられる感情について、スピノザはまず三つの「基本感情 (affectus primarius)」, すなわち「欲望 (cupiditas)」, 「喜び (laetitia)」, 「悲しみ (tristitia)」を規定する。

人間は神の力を一定の仕方では表現する存在者として、自己の存在に固執する力・コナトゥスをもっている。スピノザは、このコナトゥスを精神との関係の諸相から分類することによって欲望を規定する。すなわち、コナトゥスが精神のみに関係して理解されるとき「意志 (voluntas)」として、精神と身体双方に関係して理解されるとき「衝動 (appetitus)」として、そして衝動が意識されるときコナトゥスは欲望と見なされるのである (E.3.P.9.S.)。また、コナトゥスは人間の現実的本質として、完全性の観点から人間のある状態を測る基準となる。つまり、人間の存在を保持し肯定するコナトゥスを基準に、身体の活動力及び精神の思惟力の増減に対応して、人間の完全性の変化がとらえられることになる。そして、この完全性の変化によって、喜びと悲しみの感情が規定されることになるのである。

「喜びとは精神がより大なる完全性へと移行するような精神の受動と理解し、悲しみとは精神がより小なる完全性へと移行するような精神の受動と、私は理解する。」 (E.3.P.11.S.)

このようにして見れば、感情とは経験的現実性を示すものであり、またコナトゥスの意識化 (欲望) 及びコナトゥスを基準に測られる完全性の「移行 (transitio)」 (喜び・悲しみ) としてとらえられる¹⁰⁾。くわえてスピノザによれば、精神の受動は「非十全な観念」から生じ、「非十全な観念」は想像力の所産なのであるから (E.2.P.40.S.2), 喜びと悲しみの受動感情は想像力によって成立するものと考えなければならないのである¹¹⁾。

2 過去と未来に関わる感情

スピノザは『エチカ』第三部定理 18 において、本稿で問題とする六つの感情について言及している。人間はあるものを想像する際、そのものが存在していなくとも眼前にあるかのように思い浮かべる。その想像が「時間の像 (imago temporis)」と結びつくとき、その想像は過去あるいは未来の像として見なされる。しかしながら本来、その想像自体は一時間の像を捨象して考えれば—現在の像と異なるものではない。反対に、過去あるいは未来の像は時間概念が結びついた現在の像であり、それ故に人間は過去あるいは未来の像によっても現在の像と同じように感情をもつことになるのである¹²⁾。

「人間は過去あるいは未来の像によって、現在の像によるのと同じように喜び及び悲しみ

の感情に刺激される。」(E.3.P.18)

また、過去あるいは未来の像を豊かにもつ豊富な経験の持ち主は、かえって心が迷うことになる。なぜなら、豊富な経験のため事態の結末の認識が他の像によってしばしば攪乱され、それにともなって様々な感情をもつことになるのである。こうした多様な感情が本稿で問題とする「希望」・「恐れ」・「安堵」・「絶望」・「満悦」・「落胆」の六つの感情である(E.3.P.18.S)。

スピノザは『エチカ』第三部末尾「諸感情の定義」において、感情を48の項目に分け、秩序立てて説明している。本稿で検討する六つの感情は次のように規定されており、まとめることができる。まず、希望と恐れは一对の感情として示される。

「希望とは不安定な喜びである。すなわちそれは、その結果についてわれわれがある程度疑念をいだくような未来あるいは過去の事物の観念から生じてくる。」

「恐れとは不安定な悲しみである。すなわち、その結果についてわれわれがある程度疑念をいだくような未来あるいは過去の事物の観念から生じてくる。」(E.3.AD.12, 13)

希望と恐れは、それぞれ対立的な基本感情(喜び・悲しみ)に基づくが、共通に「不安定(inconstans)」であることを特徴とする。その不安定さの理由は、未来あるいは過去のある事態の結果が不確かであり、それに「疑念(dubitatio)」を抱いているところにある。ところで希望と恐れを詳細に点検するならば、それらはお互い随伴するものでもある。すなわち、希望する者はその不確かさの疑い故に不安や恐れを抱いていると見なされるし、一方恐れる者はその不確かさの疑い故に期待や希望を抱いているのである(E.3.AD.13 Explicatio)。

続いて、安堵と絶望は希望と恐れに基づき、その疑念の除去の観点から一对の感情として整理される。

「安堵とはある喜びである、すなわち、未来あるいは過去のもので、しかもそれについて疑念をさしはさむべき原因が除去されているような事物の観念から生じる喜びである。」

「絶望とはある悲しみである、すなわち、未来あるいは過去のもので、しかもそれについて疑念をさしはさむべき原因が除去されている事物の観念から生じる悲しみである。」

(E.3.AD.14, 15)

安堵とは希望の不安定に関する疑念が除去され、望みどおりである見込みがたった喜びであり、絶望とは恐れ不安定さに関する疑念が除去され、恐れていたとおりである見込みがたった悲しみである。ただし、ここでいわれる疑念の除去の内容は決して確実な真の認識によるものではない。望むものが過去あるいは未来においてそこに存在すると想像する臆見、もう現在目の前にあると見なす信念、または疑念の原因を排除するような他のものの想像を意味している(E.3.AD.15 Explicatio)。すなわち、あくまで受動感情の成立する想像力の領域で生起していることなのである。

さらに、スピノザは希望と恐れを展開軸として満悦と落胆の一对の感情に言及している。

「満悦とは、恐れに反して実現した、過去の事物の観念をともなった喜びである。」

「落胆とは、希望に反して実現した、過去の事物の観念をともなった悲しみである。」

(E.3.AD.16, 17)

満悦と落胆は、過去の事態の結末について、事態が「実現して (evenit)」定まったと思われる結果が、不安や恐れに反して善いものであった場合に満悦となり、期待や希望に反して悪いものであった場合が落胆となるのである。

このように過去と未来に関わる六つの感情は、喜びと悲しみの感情に基づき時間様相、疑念、そして相互関係によって規定される¹³⁾。また、これら六つの感情は希望と恐れを基盤として見なすことができる。希望と恐れは疑念の除去が安堵と絶望を、希望と恐れに対する反転が満悦と落胆をもたらしている。続いて、これらの感情の基盤である希望と恐れに焦点を絞り、感情の療法の内容について考察したい。

Ⅲ 過去と未来に関わる感情の療法

希望と恐れは喜びと悲しみを基本感情としているが、感情である限り、想像力の所産である非十全な観念から生じる精神の受動である。すなわち、たとえ希望という喜びといえども療法の対象となる。その感情の療法は、スピノザにおいて次のような原理と展開を経ると考えられる¹⁴⁾。スピノザの感情の療法は、いわば「認知的療法 (cognitive therapy)」¹⁵⁾であり、理性による真の認識を形成することで受動感情を克服しようとする。その認識は自己自身の感情を対象とするのであるから反省的認識となる。感情とは、外的事物からの刺激に対する混乱した観念そのものなのであるから、その観念について明晰判明な認識を形成するならば、受動性は消失する (E.5.P.3)。しかしながら、感情の受動性を解消しただけでは、真に受動感情を克服することにはならない。それは第一段階であり、「感情はその感情の反対のより強力な感情によらなければ、抑えることも除去するもできない」 (E.4.P.7) のであるから、第二段階として明晰判明な真の認識に基づく能動感情を生み出して行かなければならない。スピノザにおいて理性によって事物を必然的に認識する限り、人間は受動感情に対してより大きな力をもっているものであり (E.5.P.6)、理性から生じる感情 (能動感情) は特に時間の点から言えば、存在しない事物の感情 (過去と未来に関わる感情)¹⁶⁾ よりも強力である (E.5.P.7) と考えられる。ところで、希望と恐れが構成される核心は、疑念及び未来あるいは過去の観念であった。それ故、これら二つの核心が感情の療法の要点となるだろう。

希望と恐れに対する療法において、まず疑念の解決が課題となる。もちろん、疑念をもたらす原因に無関心となることや別の混乱した観念を用いて解決することは許されない。スピノザにおいて疑念は事物を秩序によらず探求することから生じる「判断の停止 (suspensio animi)」 (TIE, §80) あるいは躊躇であり、ある事態について確かに結論できるほどには明晰判明ではない他の混乱した観念によって生ずるものである (TIE, §78)。そうして見れば、感情の療法として対応すべき疑念を真に除去するためには、疑念をもたらす他の観念が入る余地無く、事物を秩序立てて考察し、受動感情をもたらした事態について明晰判明な観念を形成する、すなわち理性による認識を実行しなければならぬ。しかしながら、ここでいう理性による認識とは、認識を構成するすべての要素や原因を理解し尽くすことを意味してはいない。人間は経験的世界において膨大な因果関係すべてを把握することは不可能であり、その意味で自らの身

体も含めてあらゆる事物について非十全な認識しかもちえない (E.2.P.31)。理性による認識とは、すべての事物の第一原因であり、唯一の神の本性の必然性による「永遠の相のもとで」の認識を意味していると考えなければならない。

ところで、この感情の療法は明晰判明な観念を形成することによって、まず感情の受動性を解消するが、その形成の過程で精神の能動である理性的活動から生じる喜びの能動感情をももたらすことになる (E.4.P.52)。そして、この能動感情は認識根拠に神の必然性をもつ明晰判明な観念の形成によって引き起こされたものである故に、「神の観念をともなっている (concomitans idea Dei)。スピノザにおいて、このような能動感情が「神の愛 (Amor erga Deum)」と呼ばれる。すなわち、希望と恐れへの感情に対する療法に際して、人間は疑念の解決に努めることで、いわば反省的認識の対象である事物の認識のなかに神の働きを見るとともに、自らの精神の能動を神の愛まで高めることができるのである。

続いて、希望と恐れへの感情に対する療法において、未来と過去への対応が課題となる。これまで論じたように、未来と過去は量として持続について言及されるのであるが、理性的に認識するならば、未来と過去は想像力の様式であり、その意味で決して実在する具体的な事態ではないことが明らかとなる。同時に、感情の療法である理性的活動によって見いだされるのは、未来と過去がそこへと適用される質としての持続そのものであり、持続する感情の主体の現実的本質・コナトゥスである。そして、コナトゥスは根底に神の本性を内在させていると考えられることから、持続の認識においてもまた神の観念をともなった能動感情・神の愛を見ることができると考えられる。希望と恐れへの感情に対する療法に際して、人間は未来と過去への検証において、いわば持続する主体の認識のなかに神の働きをとらえることができるのである。

そうして見れば、感情の療法は受動感情の反省的認識において対象及び主体の二方向から神の愛をもたらすことになる¹⁷⁾。スピノザは自らの感情に真の認識によって対処しようとする人間の有り様について次のように述べる。

「自己ならびに自己の感情を明晰判明に認識する者は神を愛する。そして、自己ならびに自己の感情をより多く認識するほど、より多く神を愛する。」 (E.5.P.15)

結語

これまで、スピノザにおける希望と恐れをはじめとした時間に関わる感情の特性とともに、それらに対する感情の療法の要点を検討してきた。まず、スピノザにおいて時間とは持続を量的に説明するための補助手段であり、想像力の様式である。一方、持続は量的あるいは質的な意味を合わせもつが、永遠の相のもとで持続の質的側面を認識するならば、それは事物の現実的本質であるコナトゥスを示している。次に、感情とは想像力の所産である非十全な観念による精神の受動である。そして、時間に関わる感情とは、希望と恐れを中心に未来と過去の時間様相、疑念の存在、そして感情相互の関係によって規定される。

そうして見れば、希望と恐れを構成する疑念及び未来あるいは過去への対処が感情の療法の要点となる。まず疑念の解決に際して、受動感情をもたらし対象について明晰判明な観念を形成する。すなわち永遠の相のもとでの理性的認識によって感情に働きかけ、感情の受動性を解消するが、同時にその認識の過程で神の愛を得ることができるのである。続いて、未来と過

去への対応に際しては、理性的認識によって持続する主体の現実的本質であるコナトゥスを見いだし、そこにおいても神の愛を形成することができる。時間に関わる感情に対する療法は、反省的認識において対象及び主体の二方向から神の愛をもたらすことになる。そして、スピノザにおいて神の愛は人の心に最も広い位置を占め (E.5.P.16), またいかなる対立する感情のない (E.5.P.20.S) 能動感情である故に、感情の治癒はこの神の愛をもって完成することになるのである。

注

- 1) 本稿の論述にあたっての時間様相の理解は、まずは伊佐敷氏の示す一般的理解に従う。すなわち、「時間様相」とは、「現在」、「過去」、「未来」のことである。過去はもはや無く、未来はいまだ無い。現在の事物は眼前にあって見たり触れたりできるが、過去や未来の事物は現在の事物のように見たり触れたりすることはできない。その意味で過去や未来は現在のようない実在性を持たない。しかし、かといって過去や未来はフィクションのような全くの非実在ではない。」[伊佐敷 (2010) :まえがき]
もちろん、伊佐敷氏はその著作において自身の時間論を展開するし、スピノザもこうした一般的理解とは異なる時間論をもっている。
- 2) 本稿において、特に時間様相として過去と未来を取り上げ、それらに関わる感情に注目するのは次の理由による。すなわち、時間のなかに生きている私たちにとって、現在に関わる感情はもとより切実であるが、過去と未来に関わる感情は、想起と予想を繰り返し、重ねていく私たちの生の実態の重大な内実であると考えられるからである。また、現在に関わる感情について、現に存在する対象や原因から感情が生じるのはある意味当然である。しかし、過去と未来に関わる感情についてはそうではない。つまり、もはや無く、いまだ無いと思われる対象や原因がいかにして感情を生みだすかについては考察が必要だからである。
- 3) [CM : p.234, p.244]
- 4) スピノザは書簡 12 で無限の理解を困難にする理由を、種々の無限の区別がなされていないことにあるとして、無限を分類・区別しており、次の表のようにまとめることができる。また、スピノザの無限については、[拙稿 (1993), 「スピノザにおける神の無限について」, 哲学 (45), 広島哲学会]で論じている。

[表 1] 無限の分類

分類の観点	無限の種類
無限の起源	① その本性あるいはその定義の力による無限 ② その本性ではなくその原因の力による無限
一般的理解	① 何ら限界をもたない故に無限と言われるもの ② その最大最小を知らながらも、その部分がいかなる数によっても説明できない故に無限と言われるもの
認識能力	① ただ理解されうるのみで、想像しえない無限 ② 理解されうるのみでなく、想像もなしうる無限

(Ep. 12 より作成)

- 5) 同様の見解は『エチカ』にもある (E.1.P.15.S)。

- 6) 持続の量と質の二つの意味の関係について言うならば、存在の持続は本質が非時間的であるが故に、想像力によって時間的な量として言い表される際には、無際限と表現されると考えなければならない。
- 7) [工藤 (1972) : p.381]
- 8) ウォルフソンは、『エチカ』第三部「諸感情の定義」のスピノザの諸感情について、スピノザ『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』とともに、デカルト『情念論』との対応関係をまとめている。ウォルフソンによれば、スピノザの諸感情の定義一覧に記述される計 48 の定義の内 1-43 まではデカルトの用語を採用しているが、44-48 の 5 つの感情についてはデカルト由来ではなく、スピノザ自身のものとしている。また、ウォルフソンは「諸感情の定義」一覧の構成を次のように整理している。[Wolfson (1958):p.208-p.210]
- I. 三つの基本感情 (1-3)
- II. デカルトにより言及されるが、スピノザ自身は感情と見なしていない 2 つの感情 (4-5)
- III. 喜びと悲しみから派生する感情 (6-31), 欲望から派生する感情 (32-48)
- 9) スピノザの現実性に関する見解は二様のものである。すなわち、「一定の時間と場所に關係して存在するもの」の現実性と、「神においてふくまれ、神の本性の必然性から帰結するもの」の現実性である(E.5.P.29.S)。これらの二様の現実性—それぞれ「経験的現実性」と「知性的現実性」と呼ぶ—については、[拙稿 (2007), 「スピノザにおけるコナトゥスの現実性」, 大分大学福祉社会科学研究所紀要 (7)] で論じている。
- 10) スピノザ自身も注意を促しているが、ここで言う完全性の「移行」とは変化の結果としての完全性の一度合いではない。むしろ、移行は「現実の状態(actus affectus)」(E.3.AD.3 Explicatio)として動的な「変動状態(mutatio)」を意味している。感情とは第一義的には精神の変動状態である(E.3.P.11.S)。具体的な表現を用いれば、悲しみとは「悲しくなる」ことを含意した「悲しむ」ことであり、喜びとは「嬉しくなる」ことを含意した「喜ぶ」ことである。「移行」とは、その変動状態を完全性・活動力の観点から計量的に表現するために採用された用語と考えられる。また、『エチカ』には次のような表現もある。
- 「喜びとは、人間がより小さな完全性からより大きな完全性へ移行することである。」
- 「悲しみとは、人間がより大きな完全性からより小さな完全性へ移行することである。」
- (E.3.AD.3, 4)
- 11) 先に述べたように、スピノザにおいて受動感情だけがすべてではない。想像力によらず、自身の本性的な知的能力によってもたらされる能動感情としての喜びと欲望が存在する(E.3.P.58, E.3.P.59)。
- 12) 過去あるいは未来の像は現在の像と異なるものではないという見方は、本稿で示した記憶と予想は現在の心身において形成される表象像であり、現在の想像であるという主張と一致する。また、もはや無く、いまだ無いと思われる、過去と未来の対象や原因がいかにして感情を生みだすかについては、すべて現在の想像に基づくものであると整理することができる。
- 13) 本稿で問題とする諸感情の訳語については、畠中訳及び工藤・斎藤訳の両方を参考にして適宜選択した。ただし、「恐れ」については「希望」との対応関係及び他の「安堵」・「絶望」・「満悦」・「落胆」の感情との相互関係から、訳語としては「心配」あるいは「懸念」がより納まりがよいように思われる。
- また、これら諸感情の相互関係については、畠中の次のような簡明なまとめもある。「希望していたことが実現する見込みのついたのが安堵であり、希望と反した悪いことが起こったのが落胆であり、恐怖[恐れ]していたことが実現することが明らかになったのが絶望であり、恐怖[恐れ]していたのと反対の善いことが起こったのが歓喜[満悦]である。」([] 内筆者)
- [畠中訳 (1975) : 『スピノザ エチカ (上)』, p.294]

[表 2] 時間に関わる感情

感情	基本感情の種類	関係する時間様相	疑念との関連
希望 Spes	喜び	未来あるいは過去	疑念をともなう
恐れ Metus	悲しみ	未来あるいは過去	疑念をともなう
安堵 Securitas	喜び	未来あるいは過去	疑念は除去
絶望 Desperatio	悲しみ	未来あるいは過去	疑念は除去
満悦 Gaudium	喜び	過去	—
落胆 Conscientiae morsus	悲しみ	過去	—

(E. 3. AD. より作成)

- 14) 感情の療法の成立の経緯については次の詳細な研究がある。しかし、感情の療法を主題とした検討は今後の課題としたい。

[大西克智 (2004) 「スピノザ『エティカ』における感情の治癒(1)－共通概念の射程と満足の力による支え－」, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集 (23)]

[大西克智 (2005) 「スピノザ『エティカ』における感情の治癒(2)－高邁の態勢(disposition)を肖像として念ずること－」, 哲學雑誌 120(792)]

- 15) [Curley : p.130]

- 16) [工藤・斎藤訳 (1980) : p.349] 『エチカ』第五部定理 7 への注記

- 17) あるいは、このような二方向から神の愛をもたらす感情の療法について、次のようにもまとめることができるだろう。

自らの受動感情を反省する際に、理性による反省的認識は受動感情を構成する外的原因と身体的自己についての必然的認識によって神の働きを見いだす。それにともない、神の愛を形成する。同時に、過去と未来への反省的認識は持続の本質の必然的認識によって神の働きを見いだし、そこでも神の愛を形成することになる。そして、その持続とは感情の主体であるとともに反省する認識主体である私の持続である。時間に関する感情への療法に関しては、反省的認識において受動感情の構成要素である対象とともに主体からも神の愛を生み出すことができる。いわば、私の内と外、私の前方と背後から神の働きがとらえられ、神の愛を実感できると考えられるのである。

続いて私と神との関係、また「私」とは何かが問題となる。「私」の形象は想像力において成立することを考え合わせれば [拙稿 (2008), 「スピノザにおける想像力について」, 大分大学福祉社会科学部研究科紀要 (10)], 「私」とは受動感情の内部、または能動感情の内部での「情動」・「移行」、そして受動感情から能動感情への大きな転換としての「情動」・「移行」において現象するものと考えることができる。しかしながら、この検証もまた今後の課題となる。

参考文献

スピノザの原典は次の通りである。

Spinoza Opera, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften hrsg. von Carl Gebhardt, Heidelberg, Carl Winters Universitaetsbuchhandlung, 1925, unveränderter

Nachdruck ibidem 1972, 4 Bände.

『エチカ』: *Ethica*, Spinoza Opera Bd. II (略号 E)

『エチカ』における言及には、その末尾に言及箇所を略号で示す。『エチカ』第二部定理 13 の補助定理 3 の後にある公理は、E.2.post P.13-L.3.A.2 である。また、D.は定義、Dem.は証明、C.は系、S.は注解を指す、本稿でしばしば言及する『エチカ』第三部末尾「諸感情の定義」は E.3.AD.とする。

『知性改善路』: *Tractatus de intellectus emendatione*, Spinoza Opera Bd. II (略号 TIE)

『知性改善論』における言及には、その末尾に言及箇所をブルダー版による文節番号を示す。

『形而上学的思想』: *Cogitata Metaphysica*, Spinoza Opera Bd. I (略号 CM)

『往復書簡集』: *Epistolae*, Spinoza Opera Bd. IV (略号 Ep)

スピノザの著作の翻訳にあたっては次の訳書を参考にした。しかし、適宜変更したところもある。
 工藤喜作・斎藤博訳 (1980), スピノザ『エチカ』, 世界の名著 30, 中央公論社
 畠中尚志訳 (1975), スピノザ『エチカ』上・下, 岩波文庫
 畠中尚志訳 (1968), スピノザ『知性改善路』, 岩波文庫
 畠中尚志訳 (1959), スピノザ『デカルトの哲学原理—附 形而上学的思想』, 岩波文庫
 畠中尚志訳 (1958), スピノザ『往復書簡集』, 岩波文庫

Curley, Edwin: *Behind the Geometrical Method*, Princeton University Press, 1988

Deleuze, Gilles: *SPINOZA Practical Philosophy*, City Lights Books, 1998

Hallett, Harold Foster: *Aeternitas A Spinozistic Study*, The Clarendon Press, 1930

Wolfson, Harry Austryn: *The Philosophy of Spinoza*, vol. 2, Meridian Books The World Publishing Company, 1958

伊佐敷隆弘 (2010), 『時間様相の形而上学』, 勁草書房

工藤喜作 (1972), 『スピノザ哲学研究』, 東海大学出版会

ドゥルーズ (1994), 鈴木雅大 訳『スピノザ 実践の哲学』, 平凡社

The Emotions in Connection with Time in Spinoza's Philosophy

KUROKAWA, Isao

Abstract

In this paper I tried to understand the properties of the passive emotions in connection with time and the remedies against them in Spinoza's philosophy. For this purpose I investigated into Spinoza's arguments of the time, the duration and the nature of the emotions in his *Ethica* and *Epistolae*. According to Spinoza, in remedying the emotions in connection with time, we need the consideration to the past or future idea and the doubtful idea through reason. And from this consideration, to perceive under a certain form of eternity, arises Love towards God, which is the mightiest active emotion. This Love towards God is the best remedy against the passive emotions in Spinoza's philosophy.

【Key Words】 emotions, time, duration, past, future